

ロンドンパラリンピックが提起したものは？

九州大学大学院人間環境学研究院 内田 若希

1. パラリンピックの歴史

現在、パラリンピックは4年に1度、オリンピック終了後にオリンピックが開催された都市で行われている。パラリンピックという言葉は、脊髄損傷者の国際スポーツ大会を指す「下半身麻痺の（Paraplegia）オリンピック（Olympic）」を意味する合成語として生まれたが、現在では「もうひとつの（Parallel）オリンピック（Olympic）」を意味する言葉として用いられている。パラリンピックの歴史をひもといてみると、英国王立ストック・マンデビル病院の脊髄損傷者専門病棟の医師であったグッドマン博士が、第二次世界大戦によって多くの戦傷病者が輩出された際に、リハビリテーションの一環として運動・スポーツを積極的に取り入れたことに端を発する。グッドマン博士は、「失われたものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ（It's ability and not disability that counts）」という考えのもと、「手術よりスポーツを」の方針を掲げた。パンチボールによる訓練を皮切りに、車いすによるバスケットボールや卓球なども導入していった。

1948年に開催された戦後初のロンドンオリンピックの際には、大会にあわせて病院の庭で脊髄損傷者によるスポーツフェスティバルが開催された。このフェスティバルこそがパラリンピックの起源であり、1952年に開催された国際ストック・マンデビル大会へと発展していくこととなる。そして、1960年のローマオリンピック後には、オリンピックの開催年には可能な限り同じ地で、国際ストック・マンデビル大会を開催することとなった。後の1989年に国際パラリンピック委員会（IPC）が組織された際に、このローマ大会が第1回パラリンピック競技大会として位置づけられた。そして2012年、パラリンピックは再び、発祥の地ロンドンへと還ることになったのである。

2. 「競技スポーツ」としての成熟と日本の現状

リハビリテーションの一環として位置づけられていたパラリンピックは、近年では年を追うごとにその競技レベルが向上している。そのため、パラリンピックに出場するためには、定められた標準記録の突破や世

界ランキングの上位にランクインすることなどが求められる。パラリンピックは、厳しい条件をクリアした世界のトップアスリートだけが出場できる国際競技大会へと成長を遂げてきた。近年では、諸外国の代表選手にはオリンピック同様の強化が実施されるなど、海外の障害者スポーツの状況は大きく変わりつつある。また、障害のあるトップアスリート専用のナショナルトレーニングセンターを要する国や、オリンピック選手との共用が可能なトレーニングセンターを有する国も増加している。たとえば韓国では、国立パラスポーツトレーニングセンター（通称“dground”）と呼ばれるパラリンピック選手専用の施設が設立された。さらに、わが国においては、日本オリンピック委員会（JOC）が文部科学省の管轄であるのに対し、日本パラリンピック委員会（JPC）は厚生労働省の管轄であるため、いまだ「パラリンピック＝福祉」の印象を払拭できずにいるが、韓国では管轄省を一本化して強化を推し進めている。また、日本の国立スポーツ科学センター（JISS）の設立に当たり手本となった Australian Institute of Sport（AIS）は、オリンピック選手およびパラリンピック選手のための国の施設として位置づけられている。つまり国を代表する「トップアスリート」であるならば、障害の有無に関係なく、誰でも自由に使えるということである。残念ながら日本では「トップアスリート」とは健常者の選手のみを指す言葉であり、パラリンピック選手はあくまで「障害のあるトップアスリート」とみなされるのである。

しかしながら2013年8月に、これまで厚生労働省の管轄にあったJPCが、JOCと同様の文部科学省に一本化されるというニュース報道が流れた。加えて、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催も決定し、わが国の障害者スポーツを取り囲む環境は、これからさらに大きく変わっていくことが予想される。

3. ロンドンパラリンピックが提起したもの

さて、60数年ぶりにロンドンにパラリンピックが還ってきたわけだが、パラリンピック開幕前、英国全土78局のテレビで「Meet the Superhumans（超人たち



写真1 ロンドンパラリンピックのメインスタジアム

を見逃すな!）」と銘打った予告編が流され、話題になった。この予告編は英国の民放 Channel 4によって制作されたもので、ビートのきいた音楽とともに流れる映像は、障害があるのにがんばっている姿ではなく、「一流アスリート」の姿を映し出した。

日本では、大会期間中になると連日放送されるオリンピックと違い、パラリンピックの放送はきわめて少ない。しかし、Channel 4では一日中パラリンピックの映像を見ることができ、競技場に行かなくても十分に楽しむことができた。そしてそこに映し出される姿は、やはりまぎれもなく「一流のアスリート」であった。開会式は北京大会の3倍の視聴者数を記録し、陸上、水泳、車椅子バスケット、車いすテニス、ブラインドサッカーなどの人気種目は予選から満席となり大歓声に沸いた。イギリス選手が出場する種目のチケットは連日ソールドアウトとなった。大会会場や市内各所にパブリックビューイングが設置され、会場はどこも人で溢れた。親子連れの姿も多く見られ、格好良い選手たちは、子どもの憧れのヒーローになったという。

また、街中に目を向けてみると、ロンドン大会に向けて導入された視覚障害者のためのバス停名のアナウンス（日本では当たり前になっているが、海外ではな

いところも多い）は、多くの乗客に喜ばれたという。店の前の階段をなくせば、障害者だけでなく、高齢者やキャスター付きの荷物を引く人、ベビーカーを押す人にも便利になった。ロンドン大会が目指したものは、意識や社会の変革は、障害の有無にかかわらず、すべての人の利益になることを理解し、違いを認め合う共生社会のさらなる成熟にあったのではないだろうか。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定した今こそ、ロンドン大会の姿勢から学ぶ必要がある。そして、競技力向上やメダルの数だけでなく、われわれの意識の改革もまた、その成果として問われる必要があるといえよう。

参考資料

- 内田若希 2007 スポーツ・タイムマシン「1964年11月アジア初のパラリンピック開催」. 体育科教育11月号, pp.68-69.
- 内田若希 2012 パラリンピック選手に対する心理サポート. 体育の科学, 62 (8), 576-580.
- 読売新聞 2012 (9月29日夕刊) 見聞録2012 — パラリンピック⑥.